

6

近代日本における体質医学の形成

—結核の病因論を中心に—

大道寺慶子

慶應義塾大学 社会学研究科

本研究は、日本における体質医学の歴史的展開をたどる手掛かりとして、20世紀前半の結核の病因論を取り上げる。

「体質」は、現代の日本人が日常的に自らの心身の問題を説明する際に用いるポピュラーな概念の一つであるにも関わらず、その成立過程も理解も、きわめて漠然としている。一般には「遺伝的素因と環境要因との相互作用によって形成される」個々人の特質と定義される。より詳しくは、形態学的特質(体形・骨格など)、機能的特質(病的反応の特徴など)、精神的特質(性格・知能など)という主に三つの要素によって総合的に規定される、外界からの刺激に対する個体の反応、のように説明される。体質という用語が現れたのは明治以降であり、大きく分けて、生体観測や古人骨計測のデータなどに基づく人類学の系譜と、遺伝学や免疫学などに基づく医学の系譜に分かれて伸展したようである。前者の代表的な例として、足立文太郎(1865~1945)の『日本人体質之研究』があり、その学問の伸展と衰退は、とりわけ大正期から日本敗戦にいたるまでの、日本人種論の探求と深く結びついている。後者は、体型と人格と発病(特に精神病を発症しやすい性格)に相関性を見出そうとしたユング、クレッチマーやシェルドンのような精神医学における研究がよく知られている。

本研究の目的は、個々の理論の内容を検証したり、各学説の相互関係を解明したりすることではない。正式な医学用語か否かはさておき、20世紀以降の日本の医学では、肺結核や精神疾患など、原因が一つに特定しにくい(と考えられた)疾患に対する説明用語として、広く浸透してきた。しかし、現在の欧米では体質に相当するConstitutionは、日本と比して一般的ではなく、類語でより古典的な表現PredispositionやDiathesisの認知度は更に低い。なぜ「体質」の概念は日本で広く受け入れられ、現在に至るのか。

本研究は、20世紀前半の日本の医学において、体質論が重要性を増していった過程をたどるにあたり、結核の病因論に着目する。それは19世紀末、遺伝学の発展とともに、ある種の血統の弱さを遺伝の表れとする説が顕著になった時、その議論の核の一つに結核の病因論があったからである。コッホによって結核菌が発見されたのは1882年であるが、ツベルクリンの失敗とも相まって、その後も結核を引き起こす複合的な要因について、様々な説が浮上した。その一つが「体質」である。結核(=肺病)に罹りやすい「体質」としては、例えば「顔色蒼白」「知覚が極めて鋭敏」「胴部が長く薄い」といった特徴が典型的なものとして挙げられ、通俗的な理解として、結核の病そのものが遺伝するわけではないが、上記のような体質は遺伝性であり、結核菌を誘致する素地となる、と論じられた。さらに例えば暗く、湿って密集して不衛生な環境は、こうした体質を助長するとされた。19世紀のヨーロッパにおいては結核の伝染説、遺伝説、瘴気説が併存していたが、「遺伝、素質、免疫、過敏症」等を合算する体質(『病理学読本』1940)は、これら既存の病因論を統合し、且つ偏在する細菌と発病の個人差の因果関係をも説明し得る概念であったといえる。

本研究は、こうした結核の病因に関連する体質論を取り上げ、それを20世紀初頭のMedical Holism(全体観的医学)の文脈で読み解くことを目指す。Medical Holismはとりわけ1910年代から1930年代に伸展した。その背景には、インフルエンザのパンデミックやポリオなど、19世紀には福音であった細菌学が対応しきれなかった新しい感染症の登場も関わっていると言われる。細菌学のもつ還元主義への反動は、人体を生態学的・社会的な環境の中で読み取るアプローチを強調し、様々な代替医療の登場を促しただけでなく、正統な西洋医学にも採り入れられた。その表れの一つとして、体質医学を歴史的に意義づける。